



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	書誌家の立場から A Job as a Bibliographer
Author(s)	宮崎芳三 (Yoshizo Miyazaki)
<i>Citation</i>	Shoin Literary Review, No31 : 79-93
Issue Date	1998
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

書誌家の立場から

宮 崎 芳 三

(日本ヴァージニア・ウルフ協会第9回全国大会特別講演、平成元年1989年10月7日広島大学)

協会から近藤先生を通じてなにか話をせよと言われて、御指名いただいたのはありがたいのですが、私に話せることはごくわずかしかない。そのひとつ、書誌を作っていて経験したこと、そのとき感じたことを話させていただきたい。書誌編集という特殊な観点からのお話なので恐らく退屈なさるだろうと思うけれど、しばらく御辛抱下さい。

御存知ない方もおられると思いますが、『日本における英国小説研究書誌』というのがあります。どういうものかと申しますと、日本人の英文学研究者がイギリス小説について書いた論文の題名などが書いてある本です。論文の筆者名題名の他、掲載雑誌名、その巻・号数、ページ数が書いてあります。単行本では著者名、書名、出版社、ページ数が書いてあります。そういう内容の本が4冊出版されていて、合わせて、昭和43年1968年から、昭和60年1985年までをカバーしています。それ以前に、いわば準備期間のようなものがあって、それは昭和39年1964年から始めました。この分は『英国小説研究』というものに発表しました。その期間まで含めると23年、単行本にした分だけで言うと17年ですが、その間、だいたい中断することなく書誌の編集をやってきました。編集にたずさわったのは、榎本太、中川忠、水越久哉それに私というメンバーですが、むろんその他にも、たとえば何人もの方に論文のような長い書評を書いていただいたり

して、この書誌は、実際思いがけない多くの方々の御努力に助けられてできたものです。

その間、編集者のひとりとして、いろいろの経験をした。その経験の大半は、これがもしイギリスアメリカでこういう書誌を作る場合ならば、たぶんこんな経験はしないだろうと思うようなことでした。日本的と言いますか、私たちお互いに日本人だなあという感じをつぶさに味わったわけです。

たとえば、ある研究者にある論文を送って下さいと依頼する。すると返事がきて、中に抜刷がなくお手紙だけある。ン？　と思って読むと、お恥ずかしいものでとてもお目にかけるほどのものではありません、と書いてある。「そのうちちゃんとしたものを書くから、そのときまで待ってくれ」とおっしゃる。そう言われるお気持ちはわかるけれど、私としては論文を集めなければならないので、どうぞそうおっしゃらずに、などとまたお願いをする。そんなやりとりをなんどもしました。かと思うと、依頼通り抜刷を送ってきて下さる。中に手紙があって、見ると「お粗末なものでとてもお目にかけるほどのものではありませんが」などと書いてある。ていねいな御挨拶で、これまたわかるのです。こういう方にはやはりていねいにお礼の返事をさしあげるということになる。またもっとべつなお手紙をもらったこともありました。だいたい前のことですが、いまだに私は忘れられない。それは、論文抜刷を送って下さいとお願いしましたら、しばらくして送られてきた。あけると長い手紙がある。なんとなく不吉な感じがするのですね。でそれを見るところ書いてあった。おっしゃるには、論文を送る、がしかしこの論文は、(と言って中に2篇の抜刷が入っていたのですが)じつは自分を教授にしてやるから書け書けと言われて大急ぎで書いたものである。業績の数をそろえるために書いたのだからふつうの論文とは違うものである。そのことをよく理解してくれないと困る、とまあその間の事情がくわしく説明してあった。実際のところ、たいていの大学で、ある年齢になったら順ぐりに教授になってもらわないと、教室の運営に支障をきたすのですね。それはもうよくあることで、こういう手紙を読むと、その

方の気持ちも十分に察しられるわけです。しかしそういう御事情がどうであろうと、書誌編集者としては、なんとしても論文抜刷をちょうだいしなければならぬ。

じつは書誌を作るとき、私たちは、原則をふたつ立てたのです。その原則を立て通すためには、許される限りの時間をかけ、能力全開でやろう、とまず始めに決心しました。ふたつの原則とはなにかと申しますと、第一に、書誌は網羅的でなければならない、という原則です。これが原則の一、二番目の原則はあとで申しあげますが、第一はとにかく集めるということです。日本人の書いたイギリス小説に関連ある学術論文単行本はみな集める。どんな手間をかけても集める。そうきめたのはいいのですが、これがやってみるといろいろむずかしかった。

まず論文を集めるにはふたつの方法があるわけです。ひとつは個人あてにお願いするやり方、もうひとつは個人でなく大学図書館や学部をお願いするやり方。個人相手のときのことはさっき申しあげましたが、じゃ公共機関相手のときはどうか。ことが事務的に運んでなにも問題はないか、というと、むろん大半は私たちの依頼に答えてすぐ紀要を送って下さる。しかしヤヤコシイ相手というものはあるもので、こちらが依頼すると書類が送られてきて、名前書いて判ついて申請せよ、と言われる。まあそんなことはお安い御用ですが、本当に手ごわい大学もあった。というのは、こちらが依頼の手紙を出しても返事がないところがあった。ウンともスンとも言ってくれない。2度手紙を書いて2度とも相手にされなかった。そういう経験をして、私は、ひそかに全国愛想なし大学番付表を作ったことがあります。その横綱がどこかここで名をあげるのは控えますが、この番付表は世間で言う一流二流大学の格づけとだいぶ違うものであることだけは申しあげたい。

しかし文献を集める上で困難なことがいろいろあるとは言いましても、それらはどうにか始末できる。手を尽くせば結局はどうにかなるのです。ところが本当に始末に困る問題がある。それはじつは、相手の側の問題ではなく、こっち側の、私たちの方にあるのです。私たちの立っている足も

とにある。どういうことかと申しますと、学術研究論文を集めると言うが、いったいそれはどういう書きものを指してそう言うのか、という問題です。こうなると、もう私たちの考え方そのものが問われているわけで、答えるのがむずかしい。そのむずかしさにくらべたら、たとえば少々愛想のわるい大学があろうとたいした問題ではないのです。

学術論文を集めるということなのですが、これを逆に言うと、ではどういうものを集めないか。たとえば私たちは、小説の翻訳についている解説はとらない、ときめたのです。そうはきめたけれど、これは微妙な問題で、ある翻訳の解説に、じつに新鮮な刺激的なものがある。そういうものを前にして、私たちは困惑しきったのです。考えてみると、翻訳ということはテキストの精読に他ならない。「解説」というのは、その誰よりもていねいにテキストを読んだ人が書くのだから、それがしばしばありきたりの論文よりずっと内容のあるものになるのも、当たり前といえは当たり前です。翻訳の「解説」で、とりあげないのが惜しいものが、私がおぼえているだけでもいくつもありました。私はそれらの訳者の方々に、書誌にとらなくて申しわけない、とわびたいくらいです。

そういう問題ひとつとってみても、私たちは困り切って、では少なくとも積極的にこれだけは絶対にとるというものをきめて、それはもう徹底的にとることにしよう、と考えたのです。そこでまず大学短大の紀要論文をとる、と。そして紀要と性質の似ている学術同人誌の論文もとる、と。せめてこのふたつのものは、とりはぐれないようにしようと思いました。ではなぜ紀要に集中するか？ いったいあの紀要とはなにか？ ああいう雑誌は、イギリスアメリカには日本のような形ではないみたいなので、いっそう私の興味をひくのです。

ちょっと脇道にそれるかもしれませんが、ここで少し私がふだんに考えていることをお話したいのです。紀要とはなにか、と申しましたが、紀要というものを正面から論じた論文があるのかどうか、私は知りません。まあ論じるほどの値打ちはないということでしょうか。人はだまってにも言わないが、私はそうとう多くの人が紀要を軽く考えて見くだしていると

思うのです。大学の予算かなにかで出ている先生方の業績かせぎの雑誌であると。あんなものを書くより、英文学会の『英文学研究』や『英語青年』に1篇でも書いた方がえらいと。おおよそそんな風に考えられているらしい。ところが私の考えは少し違う。私は、紀要を、だいに考えているのです。とにかく紀要という雑誌は、売名とか金もうけとかを目あてに作られた雑誌ではない。その珍しい特徴の故に、私はこれをだいに考えているわけです。紀要は売らない。あらためて考えてみると、本当にふしぎな雑誌ですね。こんなに日本中金もうけに夢中になっている時代に、あの雑誌はお金を超越している。小説家も売れるものを書く。結果として売れないことがあってもとにかく売りものをつくる。芸術家もその点商人なのです。ただ紀要に論文を書く学者だけです。私の見るところ、この財テク日本で、彼らだけが売れる売れないを越えた仕事をしている。御自分では気づいておられないかもしれないが、いい年をした人が、夏休みの暑いときなんか朝からウンウン言って論文を書いている。こんなことしているのはいまだき紀要に書く学者だけです。同じとき、みんな一日働いていくらという暮らしをしているというのに、です。まあ大学の教師というかなり安定した位置におられるから、こんな夢のような仕事ができるのでしょうか。

とにかく私の考えでは、学問研究はこの世の打算を越えていると思うのです。その意味では、本来の宗教と同じです。その越えていることのはっきりとした目印は、金にならないということで、紀要に論文を書くというのが、それにあたる。しかしこの世を越えるには本当はつよい意志の力が必要です。むかしのえらいキリスト教徒のように。ところが失礼だが、たまたま文章を書くのが好きで、商業雑誌に売れるようなものを書きたいのだがそれが書けないから、しかたなしに紀要になにか書いてそれで満足している、という人がいる。そういう人は、紀要はなにを書いても自由だというのを逆に利用して、あまったれた書きたい放題を書いてしまう。

私は、長い間、降っても照っても紀要論文を読みつづけて、よく人からたいへんですねとか、ヨーヤルとかなぐさめられたりからかわれたりした

が、私じしんはあまり飽きなかった。おもしろかったですね。紀要という世間の常識を越えたところにある自由な舞台に出ると、その人の精神がまざまざと露骨に出る。紀要だからこそこんなに学問的なりっぱな論文が思いきり書けるのだという場合もあれば、紀要だからこそバカらしきに人を仰天させるような書きもののものつたりする。大学教師といえどとにかく頭がいい人なわけでしょう。いまの日本の頭のいい人のピンからキリまでの代表が、紀要にはありますね。これは有名無名とはあまり関係がない。有名だからその論文もりっぱとはいかない。むしろ、有名な、というのは新聞雑誌が高い稿料を払って書いてもらいたがる人のことですが、こういう人がたまに紀要に書いたりすると、ムチャクチャ手をぬいて書きますね。私はそういう人を2、3人知っているが、この人たちは本当は、学問に不向きな、ていどの悪い俗物であろうと思っています。

それにしてもこういう紀要雑誌を実際には各大学の図書館がもて余しているのは悲しい現実ですね。まるで歓迎されないお荷物というようなものになっている。たいていどこの図書館でもそうだが、ただそこへ送られてくるものを受け入れるだけのよう。受け入れたい紀要を積極的にこちらから要求し取り寄せるというのではなさそうです。ましてある明確な方針を立てて、それをもとに整理し保管し利用に供するというのをちゃんとやってる大学図書館を見たことがない。ひどい図書館になると、縄でしばって書庫の隅に積みあげてあります。ある大学図書館の書庫に入れてもらってその縄でしばられた紀要を見たとき、私は悲しくてたまらなかった。むしろ大半の図書館はそんなむごいことはしない。たいていは棚に置いてある。しかし棚に並べてあるがどうもその並べ方は行きあたりばったりで、並べる順番もよくわからないといったぐあい。こういう状況は、だんだんひどくなっていくみたいです。考えてみると、紀要に書くのは私たちです。まず私たち自身が紀要というものをだいに考えないで、ただ図書館の人にだけ紀要をだいにしてくれと要求することはできない。だからせめて私たちが、この紀要というものの純粋に学問的な性質を理解し、それがかけがえのないものだと考え、そういうものとして扱うという風になら

なければならぬのに、なかなかそうならない。

話を書誌のことにもどしますと、網羅的に論文を集めるとして、とにかく紀要雑誌を集める。それがたとえば看護婦さんを養成する短期大学だろうと、そこの紀要を集める。だってどこにだって英語の先生がおられて、その方が英文学の論文を書かれるかもしれませんから。いや私の経験では、小さな町にある学生数の少ない短期大学などに若い英文学研究者がおられて、驚くほど鋭い論文を書かれることがあるのです。これはもう絶対に見逃せない。だから私たちはそういう学校をさがし出しては、紀要を見せて下さいとお願いするわけです。

こうして私たちの書誌編集の第一の原則、網羅的に集めるというのは、実際は、紀要論文をとにかく徹底的に集めるということになったわけです。それに『英文学研究』といろいろな学術同人誌を加える。その他、商業雑誌としては『英語青年』だけ入れる。これはいわば研究者の仲間雑誌ですから。そしてこういう調子で集めると、だいたい年500篇の論文が集まる。私はこの数を尊いものと思います。よう言うでしょう、日本という国は商売だけ熱心で文化の方面の活動はサッパリだめだと、したり顔して言う人が多い。私もついいま財テク日本なんて言いました。でも、大ざっぱに見ればそう見えるかもしれないが、少しでも目をくつつけて見ると、実情はその評判と違う、と私は思っています。英国小説研究というごく小さい学問分野だけとって見ても、年に500篇もの論文が書かれている。つまり500人もの人が、打算を越えた無償の知的活動に汗を流しておられるのです。そういう人たちは新聞雑誌やテレビには出てこない。山口大学のあの先生、新潟大学のあの先生、なにになに大学のなに先生という風に、私の頭にはすぐに名前があとからあとから浮かんできますが、そういう方々は、その大学で日々学生を教え勉強を続け論文を書いておられる。地の塩だなあ、と私は思うのです。

こうして書誌のために論文を集めて、まずその数の多さに私は感心するのです。それからもうひとつ、それらの論文を見て、D.H. ロレンスを論じたものが多いのは、この20年以上を一貫した特徴です。以下多い順に、ハ

ーディ、ジョイス、ディケンズ、ウルフとつづく。これがなにを意味しているのか私にはよくわからない。その5人の中でも、ロレンス論が群をぬいて多いのです。なぜなんだろうとなんども考えてみました。ロレンスの思想とか言って理屈が言いやすいからでしょうか。それもあるでしょうが、やっぱり大もとは、この国の研究者のまじめさという点があると思う。あの作家の求道者のような性質にひきつけられるのではないのでしょうか。私たちの中に、なにか道徳的な支えがほしいという気持ちがあって、それで彼の作品に近づくのではないのでしょうか。

そういう紀要にのったたくさんの論文をずーっと読み続けてきて、その間にびっくりするような大きい変化がありました。英国小説研究というごく狭い領域での変化ではありますが、それは、その狭い領域を越えた広い意味をもつ変化であるように、私は思うのです。論文の筆者はだいたい大学短大の教師です。その人たちは、知識のある、いわゆる文化知識人です。だから私は、この20年以上の間に起こった変化は、わが国の文化知識人全体の中で起こった変化を、たぶん代表して示すものである、と思っています。

ふたつあります。ひとつは女性の登場。もうひとつはナショナリズムです。

第一の方から申しますと、とにかく英国小説研究者の中に女性がふえてきた。それも急激に、です。しかもそのふえた女性が、いままで男ばかりでやっていたときには考えもつかなかった見方で議論をするようになった。それはもうここ何年か、年を追うごとにつよく印象づけられるようになった。身近かな例ですが、大学院を終えたころ友達同志が結婚し、奥さんの論文がとてもよくてそれがもとで就職できた。夫はだめであいかわらずアルバイトをしている。奥さんが私に見せた健康保険証に、扶養家族一名として私がかわいがって教えた男の名がのっている。ショックを受けましたね。始めてそういうものを見たのが何年前でしたか、いまではさすがに頭の古い私も慣れた。そういう実情、そういう暮らしの変化を土台にして、そこから女性研究者のひじょうにすぐれた研究が出てくるようになっ

た。私の見たところ、これがとくにここ10年くらいの間に起こった第一の変化です。

第二の変化の方は、女性の登場というように具体的に目に見える現われ方ではないけれど、私にははっきりと感じられるのです。ナショナリズムと私は申しましたが、それは、まぎれもない日本人としての自分の言葉で自分の意見を主張するようになった、という傾向です。一例を言えば、イギリスアメリカの学者を遠慮なしに批判する、ときにはコテンパンにやっつける。むかしはそうでなかった。私の若いころは、向こうの学者批評家はうやうやしく扱われていたものです。それがいま違ってきた。ここ何年、とくに彼らの作品の読み方について、その読みの間違いは間違い、おかしいところはおかしいとはっきり言う論文が出てきた。その種の論文が最近かなりあって、そういう論文を見ると、筆者の最大の武器になっているのはテキストの精密な読みですね。訓詁の学という古くからの私たちの国の学問の伝統につながる、ていねいな読みを武器にして、西洋人のあらい読みを批判している。批判におのずから、日本人ならではの、という感じがあって、その感じを私はナショナリズムとよぶのです。これは私自身よく感じることなのですが、どうして彼らはあんなに目のあらい読み方をするのか、と思うときがある。まるで野球のグローブをはめた手で折り鶴を折っているような不器用さがありますね。私はこの国の研究者に見られる、あの細かく心をくばって微妙なところを読みこんでいく読み方が大好きです。これはもう国民性と言っていいほど私たちに共通なものですが、こういうことができる日本人ていいなあ、と思うのです。

私は書誌の編集を続けてきたおかげで、いま申しあげたふたつの大きな変化の、いわば至近距離からの目撃者になることができた。そのことを、自分で、幸せだったと思い感謝したい気持ちです。これを逆に言いますと、こういう画期的な変化の、私たちの書誌はかなり忠実な記録となりえたのではないかと、思い、ちょうどいい時期に書誌がつくれて好運だった、と思っています。

話を書誌の編集というところにもどします。前に、書誌を作るに当たっ

て、編集上の原則をふたつ立てたと申しました。その第一は、文献を網羅的に集めるということだと。そこで第二ですが、それは、批評する値打ちのある文献には批評をつける、という原則です。つまり単なるリストにはしない、批判的書誌、英米人の言う critical bibliography、あるいは annotated bibliography を作ると決心したのです。ところがこれがむずかしかった。この原則を立て通すのに、実際になにがどうむずかしかったか、そして私たちがその局面局面でどのように苦戦したか——いまそれを思い出しながら、ひとつふたつ要点をお話したいと思います。

その前に、ただ文献の名を並べただけのリストにはしないときめたと申しましたが、なぜそうきめたかということからお話したい。そういうリストだけでも記録として役に立つはずなのに、それを私たちはしなかった。べつな考え方をしますと、リストとして文献を横一線に並べることこそえこひいきなしに扱うことであり、反対にえこひいきすれば、人間で言えばみな平等だというあの権利を侵すことになる——こういう御意見もあるだろうと思うのです。そう言えば最近数年の間に、出版社から文献目録のかなり大きな本が出ていますね。英米文学関係の論文目録も出版されていて、それを見ると各項目に分けてたくさんの論文がきちんとリストに並べられている。コンピューターを使ってデータが整理されている。こういう方面の技術はずい分進んだものがあるだろうと想像するのです。そういう本を見て、技術も進歩したものだとは思いますが、しかし私はどうしてもなじめない。たくさんの論文の名がまるで記号のように並んでいる感じがする。ところが、私が一篇一篇の論文から受ける感じは、そういう記号のようなものとはまるで違うのです。どういう感じかと申しますと、私は、一篇の論文に出会うということは、たとえば言いますと、ひとりの人と知り合いになるということだという風に感じるのです。私のところへ送られて来た論文、それは、なにかの縁で知り合いになった人のようです。読んでつまらない論文というのは、たまにあっても退屈な話しかしない友人という感じ。かと思うと、キラキラ輝く感性をもってしゃべる若い友人もある。——この私の言い方をどうぞ大げさなうそと思わないで下さい。実際、論文

を集め続け読み続けていると、私はひとつの、あまり大きくはないが、なにかある仲間関係の中に、自分が入っているのを感じるようになったのです。たとえばある人から論文が送られてくる。少し読むと、ア、と思い出すのです。文体から思い出す。文体というと聞こえはいいが、まあ書き方のくせです。なにになにであるのである、と書くとか。そこでカードをくって調べるとやはりある。5年前にやはりその人の同じようなテーマの論文があるのです。なつかしいですね。——ヤア、と挨拶したくなります。人間ならば、「お元気でしたか」と言いたくなる。女性の方で、その5年前の論文と姓でも変わっていたりすると、「御結婚なさったんですね」と一言、声をかけたくなる。そういう関係が、私と論文との間にできあがるのです。くり返し申し上げますが、いまの私の言い方には、少しの誇張はあるかもしれないが、うそはないのです。そしていま私は仲間と言いましたが、そういう仲間意識というような気持ちをもっていると、その論文をたとえば統計調査上の単なる一資料のようにには扱えない。これが、論文の名をずらずら並べてそれだけですますことが私にはできない大きい理由です。むろん論文を並べたリストも、それはそれで目的によっては役立ちが大きいことは私も知っています。私がそういうリストを作るだけですませられないのは、しようとしても感覚的にできないからなのです。こういう私の感じは、関係のない人からは私ひとりの勝手な思いこみだろうと言われて、理解してもらえないかもしれない。けれども、私の中にその仲間意識は確かにあり、それどころか、ふり返ってみますと、その意識が、書誌を作る私をしっかりと支えてくれたのです。だいじな仲間だから、その仲間が書いた論文だから、自然それをねんごろに扱う、ということになる。ねんごろに、と言うのはちゃんとお相手する、ということです。論文をていねいに読み、いいところは見逃さず、それをきちんと評価する、ということです。ではどんな基準で評価するか。その点はもうはつきりしています。学問の基準です。学問的研究としてすぐれているかいけないかという判断基準です。

私はしきりに仲間仲間と言っていますが、これは、英文学研究という学問を志す人の集まりのことです。学問の仕事は楽にはできない。そのけっ

して楽ではない学問の道をいっしょに進もうとしている仲間のことです。その人たちの仕事をはかる基準は学問の基準以外にはない。だからその基準で批評をつけるというわけで、これが、私たちの書誌編集の第二の原則です。そしてそういう原則で書誌を作ること、これを、その研究者仲間に関に立つものにしたい、と思ったのです。たとえば若い研究者がおられてこの書誌を使って下さる、と想像してみます。そのときこの書誌に批評がついている方がその方の役に立つだろう。文献についているコメントやレビューを読み、そしてその論文を読んで下さって——そうか、自分より前の人はこういう論文を書いてここまでやっているのか、と知って下さったら、その上でこんどは、いままでの研究の上にその若い方の新しい研究が積まれていく、ということになるのじゃないかしら。そういう風につきつぎと研究が受けつがれていく、積み重なっていく、それが学問の伝統が作られていくということであろう、と私たちは考えたのです。だから、文献には批評をつけるという原則を立て、その原則を守り通してそこからは一歩もしりぞかないぞ、と決心しました。しかしむずかしかったですね、その仕事は。

実際にやってみて、同じ仲間の書いた論文や本を本音でもって批評するのはじつにむずかしかった、本当に油汗が出ました。これが外国人の研究書を批評するのなら、まあそれだってやさしくはないが、しかし、一日かかって原稿用紙一枚書けない、ということはない。とにかくなを書いたって相手は外国人でしょう。ふだん付き合いのない人のことをあげつらうのは、ちょうど名前しか知らない有名人のうわさをするように、楽しい部分さえある。ところがふだんから顔見知りの、それもこの前会ったばかりの人を相手に、その人の本をつけつけと論じ立てるのはじつに気がすすまないのです。かと言って、力作である、御出版おめでとう、とだけでは批評にならない。そこでこの批評の問題では、まず私たちは、論文と本とを分けて考えることにしました。そして論文の場合は、言及するだけの値打ちがあるものだけに批評をつける、ときめました。つまりことさらに悪口は言わない。だまって論文名だけをあげておく。そうきめて、最後までそ

の方針を押し通した。しかし論文はそれで行くとして、本はどうするか。論文のように短かい書きものは、いま言ったような二分法で行けるとしても、本となるとじつにいろいろでそう単純には分けられないのです。でもその中で、わざわざとりあげるほどの値打ちはないという本がある。そういう本はごくかんたんな内容の紹介だけにとどめる。つぎに、これはいい本だからていねいに批評しておきたいというのがある。こういう本の場合は、扱いがわりと楽でした。なにしろ心おきなくほめることができるのですから。reviewer として何人もの方に、申しわけないことに原稿料なしでお願いして書いていただきましたが、いい本であればあるほど、長い原稿を早くいただくことができた。ところで、ここで問題なのは、その本がだまって見過ごすことができないほど悪い本の場合です。私たちは、この種の本はほっておかないでとりあげて、そのどこがどう悪いかははっきり言った方がいいと考えたのです。そうきめたのはいいのですが、その実際の扱いには灘渋しました。こちらから、学問のためです、心を鬼にして思う存分書いて下さいとお願いするのですが、なかなか原稿がいただけない。そのあげくことわられたりする。まあ編集者としては苦勞なことでしたが、しかし、じつは苦勞はそれだけではなかった。と言いますのは、いま申しあげたようないい本と悪い本の他に、もう一種類の本があるのです。そして実際に手ごわいのはそっちの方なのです。どういう本かと申しますと、まず、とりあげるだけの値打ちがないというのではない。かと言って、大声でほめたくなるような本でもなく、それでいてはつきり悪い本というでもない。可もなし不可もなしという本ですね。しかもこれが多い。実際はほとんどの本がこれです。当たり前のことで、そんなに才能のある人が多いはずはありませんから。この白でも黒でもない、灰色のような本、具体的に言うと、読んで確かに教えられるところがいろいろあるが、全体退屈でおもしろくない本——こういう本は批評がむずかしい。へたに批評を依頼すると、それこそ、労作であるとかなんとか御挨拶のようなものを書かれたりする。そうなると処置なしですから、そういう本は、だいたいこっちで引き受けてうんうん言いながら書いていくわけです。

こうしてコメントやレビューがついて書誌ができるのですが、そのできあがりについては、私たちとしてはこれはもう御覧の通りですとしか申しあげようがない。ただ、こうして書評を書いていただいたり自分でも書いたりして、そのことからつよく感じたことがあるので、それを一言申しますと、私たち研究者の間で書評というものがわりと重要視されていないという感じを私はあらためてもちました。あっさり言って、私たちみんな書評がへたですね。りっぱな論文を書いている人が書評となると、じつに木で鼻をくくったような、なげやりな書評を書く。えらい人に限ってそうですね。だから私たちの書誌では、いわゆるえらい人には書評を頼まないときめました。かと言って若い人も困る。気持ち先走ってかたよった断定をする人がいますから。私はこの書誌編集の経験を通じて、いきとどいた書評を書くのがどんなにむずかしいかよくわかり、むずかしいわりにはそれが重要視されていないと感じました。

しかしその上で私は、でもやっぱり主張したいのは、相互批評がなければ墮落する、ということです。私たちの書誌が、もし正直で熱心な相互批評という点で落第ならば、そのときは、他の面でどんなに体裁のいいものであろうとも、その全体はまぎれもない墮落を示すものとなるだろう——そう私は考えたのです。そう考えながら、この書誌編集の二十何年をやっていくのは、一言で言って緊張の連続でした。その緊張の連続は、半面、ひじょうに疲れさせますが、また半面、私には快いものでもありました。その間、なん人かの方がたいへんですねとねぎらって下さいましたが、実際にたいへんだったのは事実ですが、その期間ずーっといま申しました快さが続いたのも本当のことです。

書誌編集の仕事は、準備期間を含めると、昭和39年にスタートしました。とくに始めごろは、なにより先に書誌というもののそのものを理解してもらわねばならないことが少なくなかったのです。論文抜刷を送って下さって、同封してあるお手紙に、その本ができたなら一冊左記の住所に送るように、と書いてあってあわてたこともあります。またそうかと思うと、抜刷を送って下さって、その校正は自分でするから、と書いてあるのでびっ

くりしてお手紙を書くと、なんだ私の論文を収録した論文集を出すのじゃないのか、と言われたりしました。そのころから思うと、いま、研究上の tool としての書誌の必要性を、まずたいいの研究者が理解して下さっているのは、大きい変化のように私には思われます。そのむかしから、私たちが書誌の編集を始めた最初から、私たちの仕事を見守り、直接間接に助けて下さったなん人かの方がおられます。たとえば、そのころ東京都立大学におられた加納秀夫さん、東京大学の寺澤芳雄さん、なくなられた名古屋大学の加藤龍太郎さんなどです。そしてそれに、近藤いね子先生のお名前をつけ加えなければ、そのお名前のリストは十分ではありません。

長い間、とりとめないお話を聞いて下さってありがとうございました。

(平成元年講演、平成9年加筆)